

おもいにもつ

お菓子

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「私はお前がこうして会いに来てくれるんだから、それだけでいい……と、思う」

恥じらいながらもそんなことを言っていた彼女が、自分の知らない間にバンドを組んで、どんどん変わっていった話。

——キラキラと。

前

目次

1

前

彼女と初めて会ったのは、中学生の頃。同じクラスになって、彼女と隣の席になった時だ。

どうも彼女は頭が良いらしく、なんかよくわからないけど学園にはあまり来ない。必要な単位は取得しているからとか、なんとかか、なんとかか。

まあとにかく、そんなこんなで彼女はあまり学園にこない。だから隣の席になったところで、関わる機会なんて訪れないわけで。俺はいつも、隣の空席に寂しさを覚えながら過ごしていた。

けれどある日、そんな彼女が学園に来ていた。詳しい理由は全然わからないが、彼女がこうして学園に来ているのはかなりレアなことだった。

だから、少しだけ話してみよう。そう思っただけで普段は空席である俺の隣に座っている彼女に、俺はこう話しかけてみた。

「……市ヶ谷さんって、可愛いよね」

「は？」

——なんて。

馬鹿みたいな一言で、俺たちの関係は始まった。

「——なあ有咲」

「なに？」

それから暫く経ったある日の放課後。

俺は家には帰らず、いつも通り学園に来なかつた有咲の家に行き直した。特別用があるわけでもないけど、それでも放課後は自然とここに来てしまう。

この自分の家には戻らず有咲の家に行き直するつても、気がつけばほぼ日課みたいなものになっていた。それくらいの頻度で来ている。

「そろそろ卒業なんだし、最後くらいは学園に来たりはしないの？」

「しない」

「即答……」

そうだ。俺たちは、もうすぐで中学生が終わる。

俺は有咲とは違う学園に行くから、有咲と同じ教室に向かうのはもう出来なくなるのだ。
だ。

だから俺としては、残り短い中学生生活を有咲と一緒に過ごしたかったんだけど……。いや、そんな露骨に寂しそうな顔するなよ。別に私だって、本気で嫌ってわけじゃない

よ。ただ、さ」

「ただ？」

「疲れるから、教室にいると」

「ああ、なるほど」

まあ、そう言うのなら仕方ない。俺も強制したいわけではないし、別に学園じゃなくてもこうして一緒にはいられるのだから、不満はない。

「けど有咲、高校生になってもそれを貫くのかよ？ 悪いことではないけどさ、あまり良い高校生活とは言えないでしょ」

「それはわかってるけど、でも……。多分、行かない」

「……まあ、無理に行く必要はないだろうけど」

ただやっぱり、俺としては有咲にはちゃんと友達を作ってほしいと思う。こうやって俺ばつかと話していても、飽きてくるんじゃないかとも思うから。

「別にいいんだよ、私はこれで。それに高校生になつたら、お前は学園にいないんだから。行く意味がない」

「……動機が不純だ」

「ふんつ。いいだろ、別に」

「まあ、うん……」

そんな理由で学園に行かないなんて、どうかと思うぞ。けど……。

「でもほら、学園に行けば新しい友達が……」

「いらない。お前がこうして会いに来てくれるんだから、それだけでいい……と、思う」

「有咲……」

「な、なんだよ！ 気持ち悪いこと言わせんな！」

「いやいや、勝手に言っただろ！」

有咲の特別になれてるそれが、嬉しかったりもする。それが俺の正直な気持ちだった。

——だった。はずなのに。

気づけば俺はそれが、重い荷物になっていった。

「今日もない、ですか」

高校生になってから、何ヶ月かが経った。

俺も流石に今の環境にも慣れてきて、落ち着いた学園生活を送っていた。

そんなある日の放課後。

俺は中学の時と同じように、有咲の家に来ていた。高校生になってからも一応来るようにはしていたのだが、俺が電車通学になったのもあって、以前ほどの頻度では来ることが出来なかった。

それでも今になってはこの生活にもなれてきたから、有咲の家に行く暇が出来てきたのだが……。

「いや、大丈夫です。それじゃあ」

今度は逆に、有咲が家にいないことが多くなった。

今日も来てみれば有咲のおばあちゃんが、有咲の留守を伝えてくれた。少し前に話を聞いたけど、どうも学園に行っているらしい。

取り敢えず大人しく引き返して、自分の家へと足を運ぶ。何もない住宅地を、一人で歩く。

しかしこれは一体、どういう風の吹き回しだ。あの有咲が学園になんて。おかしいだろ。だって、俺があれだけ聞いてみても、行かないの一点張りだったのに……。

あ、いや、違う。

学園に行くのは良いことだ。それ自体は別になんだって良い。ただ俺は、疑問なだけで……。

「……たか……」

俺は、誰に言い訳を？

有咲が学園に行くのは、とても良いことで。俺はずっとそれを望んでいて。

だから俺は多少しつこくとも、俺がいなくても学園には行ってほしいって、言い続けた。そしてそれが叶った。ほら、良いことだ。

なのに、なんだ、この気分は。俺の中にある義務感が潰されたような。

「義務？」

気づけば、足は止まっていた。辺りはすっかり夕日の色に染まっていて、もう暫くすれば夜になるだろう。

「……………」

早く帰ろう。早く。

「市ヶ谷さんって、あんまり学園に来ないからさ。ずっとその席が空っぽで、寂しいんだよ、俺」

あの日は、たまたま登校してきた市ヶ谷有咲に、単なる好奇心で色々と話しかけていた。

「だから今日は市ヶ谷さんが居てくれるから、俺すっげー嬉しいんだよね」

「そ、そう……」

当の本人は、かなり引いていたけれど。それでも喋り続けた。一方的に。

「あいつ、ホントに誰とでもああだよな」

そんな声がどこからか聞こえてきた。教室内の誰かの声だ。多分、クラスメイトだろう。

「誰でもああやって話しかけて、関わりを持つとうとする。そのコミュ力には驚きだよ」

「わかる。でもさ、あいつ——」

聞こえてないとも思っているのだろうか。それとも、わざと聞こえるように言っているのだろうか。それはわからないけど、でも。

「——なんか、義務的に話しかけてくるよな」

間違いなくこの声は、俺を否定していた。それだけはハッキリと理解した。簡単に。

「……市ヶ谷さん、今日一緒に帰らない？」

「え？ な、なんで」

「ん。いや、ようやく会えたからさ。出来れば、話せる間に話しておきたいなってさ」

思えばあの日に俺が有咲にしつこく迫せまったから、今があるわけで。

『市ヶ谷さんとは、昨日初めて喋りましたけど』

『お前、それなのにあそこまで話せるのか……』

有咲に話しかけまくった次の日に、俺は担任に呼ばれて市ヶ谷有咲との関係性を聞いてきた。どうやらその時は、あいつにあそこまで話しかける俺に驚いたらしい。

『お前は、彼女と仲良くなりたいか?』

『そりゃもちろん』

『……そうか。それじゃあ、そんなお前に頼みがある』

確かその頃、有咲は既に必要単位を取得していて、いわば休学中だったはず。でも先生はなるべく教室に来て、みんなと一緒に過ごしてほしいと言ってた気がする。青春だとかなんとか。馬鹿らしい。

『市ヶ谷有咲の友達になってやってほしい。それで、彼女が変わるきっかけにでもなっ
てほしい』

多分それは、有咲にとってはただの迷惑なのだろう。

担任といえど、他人に自分を変えてやってほしいなんて、迷惑どころか失礼だろ。

でも俺は。

てしまったらしい。

「ま、まあそれより、急にどしたの有咲」

「いや、今日ウチに来てたって聞いたから……」

「ああ、うん。それが？」

それでわざわざ来たと言うのだろうか？ だとしたらなんで今日だけ？ 今までも何度か行ったけど、お前が居なかつたことはかなり多かつたはずだ。

「いや別に、それがどうってわけじゃないんだけどさ。なんか、用があつたのかな……つて」

「別に、なにもないけど」

なんだか有咲の様子がおかしかった。どこか遠慮しているというか、なんとというか。そんな気がした。わかんないけど。

「そ、そっか」

「ああ」

「……………」

それだけ言うと、有咲は黙ってしまった。やっぱり、なんだか変だ。

「有咲、どうかしたのか？」

「いや、その……ちよつと、お前に用があつて」

「? なんだ」

少し言いづらそうにしながら、有咲は口を開いた。

「私、ちよつと前から学園の……と、友達、とバンドを組み始めてさ。今度ライブをすることが決まったから、お前にも観に来て欲しくて……」

「……………」

その有咲の口から聞く有咲自身の情報は、俺の知る市ヶ谷有咲とまるで異なっている。突然目の前の彼女が、知らない人に見えてきた。

でも俺は。

「ライブ?」

「ああ……ダメ、か?」

「いいよ、それくらい」

簡単に引き受けた。善意とか好意とかそういうのじゃなくて、ただただ俺は自分の中にある——。

——義務感で。